
コトブキタークレー！は聖地！？

蜥蜴かめき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コトブキタークレー！は聖地！？

【Nコード】

N9548E

【作者名】

蜥蜴かめき

【あらすじ】

個性豊かな動物たちの暮らす平和な町、コトブキタークレー。新入りのカメ青年・ジャックとその仲間たちが巻き起こす壮大（？）ストーリー！コトブキタークレーシリーズ堂々の第1巻！！ どうぞ、どうぶつの森をプレイしているような感覚でお楽しみください。
m (. .) m

プロローグ

今日も静かで平和な町、コトブキタークレー。そこには、たくさんの個性豊かな動物たちが楽しく毎日を過ごしている。

そんなコトブキタークレーにたった今、一人…いや、一匹の青年が門を通り過ぎ、町の地に足を踏み入れた。

「ここが聖地、コトブキタークレー……」

彼の名はジャック。今日からここに引っ越し、住民の仲間入りを果たすカメの青年だ。

なぜここに住むことになったのか、というとそれはわざわざ語るほどのことでもない。ただ親元から離れて一人暮らしをすることになったというだけのことだ。きわめて単純でポピュラーな理由と言えよう。

思い起こせば、自分が今現在ここに来ているのは、過去にものすごい苦勞をしたことにあるのだ、と彼は気づいた。今では何だか懐かしいあの思い出……。

……

……

…

時を遡ること一日前。ジャックはまだ実家の中にいた。当然のことであるが。

彼は自室で何やらバッグの中に詰め込んでいた。その横にはいくつもの段ボール。つまり、これは引越しの準備ということだ。

青年はすごい希望と不安に満ち溢れていた。一人暮らしをすれば一日中自由にできる。楽そうだ。そりゃあそうだろう。何せ家の中には自分だけだし。うるさく言う良心もないのだから。

かなり美味しい目にありつけそうだ。

だが、もちろん不安だっただけで存在する。友人は一人でもできるのか、こんな自分にも一日を営めるのだろうか、非常にくだらない心配ごとなのだが、TVなどの機械類はどのようにしてつなぐのだろうか and so on……。

そんなことを漠然と考えていると、ノックもせずに母親が入ってきた。

「うーわっ、ビックリしたあ！　ちよっ……、勝手に入ってこないでよっ！」

「ジャック……、本当に行ってしまうの……？」

ちっ、またこれか。ジャックはとてつもなく苦い物を食べたような顔をした。このセリフ、これまでに何回耳にしたんだろ。しかもこの後に続く会話もほぼ1パターンしかない。どうしたことだろうね。それは以下のとおりである

母「母さんはね、あんたのことを思っただけだよ。もしも引越して先で何かあったらどうする気？　お願いだから考え直してよ」

ジャック「うるさいなあ。何でそういうことを毎日毎日聞かされるきやなんないわけ！？　ウンザリなんだよ。一人暮らしすればそんな思いしなくても済むんだけどねえ」

母「……もう、生意気になって。小さい頃はもんのすごく素直でかわい子だったのに」

ジャック「……カチン」

……これ以上書くと永遠に続いてしまいそうなので止めにするが、とにかくまあこういった口論や時には取っ組み合いの親子喧嘩の積み重ねによってここに存在している、ということだ。

さて、いつまでも門の所にいるわけにもいかない。仕方なく彼を動かそうか。

「……え。仕方なく!？」

第一章

地図を片手にジャックは新居に向かってズンズン歩いていた。早くしないと引越し屋の人々が舞っている。カメだからって遅れるなどということは許されないだろう。

…… と思いつつ、やはりカメであるがゆえの歩みののろさは手の施しようがない。自身ののろさを呪いたい…… なーんてね。そんなギヤグを言っても全く笑えないし、笑う気も毛頭無いのだが。

うんしょんしょ、と手荷物のバッグを重そう（ていうか実際重い）に持ち上げて、その荷物のために更に更にスピードが半減したカメさんは汗をかきながら目的地にたどり着こうとした。

苦節約一時間半経過。 やつと新居に到着。

今日から暮らすその家は、並よりちよつと高そうな一軒家だった。深緑色に染まった屋根がいかにも彼らしい雰囲気を出している。予想に反せず、業者の方々はずっと待ちぼうけていたらしく、中には居眠りまでしている者もいた。これがすべてにおける証明であり、過去を見通す節穴だ。んなもん要らないけどさ。

すいませんすいません、と平謝りして彼らは引越しの準備をした。一瞬ジャックは「居眠りとかしてる暇あったら先に家具置きやいいのに」と思ったが、その思考は光の速さでショートした。そうだ、理由は知らんが家の鍵は僕自身が持っていたんだった。

自らの過ちにより、2時間いやそれ以上の無駄な時を生み出していたのかとジャックは心底途方に暮れ、大後悔していた。もし鍵を業者に預かってたらこんなことにはならずに、きっと今頃すべての配置が終わった家で一休みできたというのに。超反省。

日が暮れ、空の色が橙から紺に変色するかどうかといった頃合いにようやく片づけは終了、ジャックはお世話になった引越センターの人々に礼を言い、外まで見送った。

もう動く気にもなれないが、食事と入浴だけは最低限しなくてはな

らない。衛生上、不衛生だ。

面倒くさい、とボヤきつつジャックはそのまま歩き、近くにあった24時間営業のコンビニを発見、インスタントラーメンやらレトルトカレーやらをたくさん買い込み、帰宅した。しばらくこれで何とかなるだろう。乱れた食生活だが、しょうがない。

ラーメンをすすって麦茶を飲みほし、しばらくTVを見たあとタオルや財布その他もろもろを持って銭湯まで行った。風呂は一応使えるみたいなのだが、沸かすのが面倒だったのだ。それじゃあ、なんでキミはさつきポットのお湯を沸かす手間暇を惜しまなかったのか、そいじゃあレストランにでも行きゃあよかったのに、といった質問事項には答えを詰まらせる。とつ、とにかく今は食事と入浴を済ませられればいいんだよ！ というのが今のところの持論兼結論だ。

無事に家に帰り着いたのが深夜。数年前ならとつくのとうに補導されている時間帯だ。そんな時間に出歩いていても誰の目も光らないのは、こないだ成人（成亀？）式を神社で挙げたための所以である。あ、でも猫の目は光ってたのかな？ あと車も。

と、いうようなくだらないことを頭の中でずっと考えつつ、ジャックは殻の中に籠って眠った。こういう時、コウラって便利だと思っし、自分がカメに生まれてよかった、と一番実感できる唯一のシーンだ。

さて、明日にでも探検したりあいさつしたりすっかな……。楽しみはぐんぐんふくらんでいく。

やがて、鶏が鳴き、同時に夜明けがやってきた。

鶏の声があまりにも大きすぎたので、ジャックは目覚める（というより、コウラからニユツと顔を出す）ことを余儀なくされた。まだ眠いが眠れない、朝はつらいよ……。

出かけようかとも考えたのだが、何分まだ早朝。たぶん近所回りしてもきつと誰も起きていないに相違なかるう。だからって朝食をとる気にもなれない。目を半分閉じて座布団に座ったまま、ジャック

はしばらくボーッとしていた。うつろになっていたため、彼の視界は時空が歪んでいるみたいだった。もしもこの世界がトチ狂ったらこうなるんだろうな的なことを思っていた。やがて時は着々と動いていき、朝の七時をまわっていた。つけっぱなしにしていたTVからニュースのアナウンサーの声が流れている。

「おはようございます……はじめまして……。僕は昨日越してきたカメのジャックです……。どうぞ……よろしく……ぐー……」ジャックはTVに映った男性アナに向かってそう言った。しかもまだ眠り声である。いい加減に起きろよ。

それにしても彼は本気でアナウンサーに挨拶したのだろうか。それともやはり寝ぼけているのか。

練習か、アホか、それは読者の皆様のご想像にお任せする。すまね、何も考えずに書いてるんです。

30分後。窓から朝の日差しが流れ込んでくる。少し熱い光がジャックの体を照らしてる。うつつしいなア、と思い始めやつと動き出す。相当な寝ぼすけさんらしい。

TVの電源をOFFにし、窓を反射的に見た。住民たちが何人か外に出ている。冒険がてらちょいと挨拶でもしよう。

そう思っただけで彼は帽子を被りドアを開けた。まだ自分の未来を知らずして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9548e/>

コトブキタークレー！は聖地！？

2010年10月28日05時51分発行